# ≪ 註 ≫

① 本論文に引用するクルアーンは、1923年に刊行された、いわゆる標準エジプト版に準拠したものである。いわゆるフリューゲル版との節番号の相異は、例えば標準エジプト版で7章29節がフリューゲル版で7章28節に相当するような場合、7章29節(28)というように表記した。両者の節番号が同じ場合はそのまま。

② これら15個は、例えばⅠの7章29節(28)のものはこの29節(28)の一部であり、XVの85章13節のものは13節の全部であるというようにまちまちである。

③ 訳は出来るだけ意味を正確にすることを期し、訳文の流麗さとか、原文の文体の反映とかは(何りに望んでも筆者の能力を超えることとはいえ)期さなかった。従って直訳的にすぎ、訳としてぎこちなくなったきらい

があるがあえてそのままにしておいた。訳文中の括弧内は筆者の補筆である。

④ 善行への報いと，不信者への報いの相異に関しては，牧野信也著『創造と終末』（新泉社，昭和47年）に興味深い記述がある。

⑤ 意味がはっきりしないといえば，この節の出だしの一文からして要領を得ない。汝等（人間は）ことごとく（アッラーに）帰ってゆくというのは分ったようでそのじつ極めてあいまいである。これも出来るだけ明確に解釈しなければならぬ。

⑥（奇妙なことと言うようであり，すぐこの段階でこのような註を入れることは適当ではないかも知れないが）現世に創造されたと同時に或る意味では来世に於いても創造されたのである。しかしそれは全く逆にアッラーによる人間の創造の瞬間は現世に於いてでもなければ来世に於いてでもないということもまた言い得るのである。創造は絶対であって，現世と来世という区別は事柄自体として

その後に来る。そして或る位相を通してみればそれは現世に於ける創造であり，また他の位相を通してみればそれは来世に於ける創造なのである。この点については後に触れるであろう。

⑦ 抽象よりも具体，一般よりも個別，全体よりも部分というアラブ人の傾向はいろんな分野で指摘され得る。例えば美術や音楽に於いては，或る部分的な模様ないし旋律を次々に組み合わせて全体に拡大してゆくアラベスクとよばれる様式があるが，これは読んで字のごとくアラブ人が最も得意とするものである。アラベスクでは全体を，全体としての眺望・構成としてみるのではなく，部分の反復・集積としてみようとする。ここでは端的に部分が大切なのである。

個々の個別的なもの，個物へのアラブ人の凝視は極めて鋭い。アラビア語の数詞に関する興味深い諸規則；或る種の事物の名前に信じられないほど多く同義語があること；ほん

のちょっとした違いしかないものを示すのに全く別の単語を用いること（例えば，砂山に数頭のラクダが遊んでいるとする，その中のあるラクダは肥っておりあるものはやせているとする，このような場合日本語の感覚では肥っているようとやせているようとラクダはラクダであるからこれらを名付けてせいぜいでぶラクダとかやせラクダというであろう，つまりラクダという一般的な呼称に形容詞相当句を結合して合成語として表現するのが普通である，ところがアラビア語の感覚ではそうはいかず，上述のような合成語として表現し得るようなことに対していちいち別の単語で表現する（例えば，でぶラクダはハール，やせラクダはマスバースというように），のみならずその肥ったラクダにせよやせているのにせよ或る一頭のラクダに対して，誕生直後の赤ちゃんラクダからはじまって老いぼれラクダにいたるまで，その成長の諸段階で日本語の出世魚の名前のように（但しアラビア語

ではけたちがいに微妙に食くちがった事話をあてることと（例えば，赤ちゃんラクダはサクブ，老いぼれラクダはジャッハーダというように）等々；これらの興味深いことがらについては又別に稿をもうけて論じたい。

⑧ 現世に人間が存在する以前に，現世以外のところで（アッラーのところで）その人間が存在していて，その時その人間は子供の状態で存在しているとして，アラブ人にはただ漠然とした子供というものは考えられないのであって，明瞭な一人の具体的な子供のイメージであらねばならず，そのような具体的な子供であるとすると，しかしながらまたいきなりそういう子供として自分があるということにアラブ人は納得できず，そういう子供に育ってきた連続的過程は一体どういうことになるのかの問題に悩むであろう。

⑨ 一方死後の人間のイメージは，死（七）時の状態の続きとして考えることが出来るのでかなりはっきりとしている。

LIFE C 151 20×20

⑩ クルアーンによればあらゆるものはアッラーの創造によってあらしめられており、無論人間の霊魂もまたその創造によるとされるが、興味深いことには、人間の霊魂の創造に関する記述は数が少なく、しかもその際の説明が簡単で、霊魂はいわば人間の視力・聴力等の諸機能の一つであるかのようなあつかいを受けていることである。これに対して圧倒的多数をしめるのは人間そのもの（霊魂だけとか肉体だけとかではなく）の創造に関する記述で、しかもその際の説明が詳細である。且つ大切なことは、かくかくしかじかの材料を用いて人間を創造したという説明が多いことで、その材料はいわゆる肉体性を強調するようなものなのである（例えば泥土など）。このようにみてくるとクルアーンは人間というものを少なくともその創造の段階に於いては肉体と切り離しては決して考えてはいないといえる。

⑪ キリスト教に於けるイエスとちがって

ムハンマドはイスラームでは全くのただの人である。後にイスラームの教義の展開につれて何がしかの特殊性，神秘性をムハンマドに付与する動きもあらわれたが，ハディースの伝えるところによれば，ムハンマドは何か特別な人間あつかいされることを嫌い且つそのようにみることを信徒達にいましめたという。即ち，少なくともムハンマド自身の自覚に於いては，彼はただの人であり，そうあるべきだと考えていたのである。これはイスラームにとっては大変重要なことで，アッラーはただの人であるムハンマドに啓示を下したのであり，ただの人であるが故に啓示を下す相手はムハンマドの代りに誰でもよかったのであり，貴方でも，我々は私でもよかったのである。アッラーと我々人間とはムハンマドを仲介とする間接的な関係にあるのではなく，アッラーとムハンマドの間の直接性は直ちにアッラーと貴方，アッラーと私との間の直接性と何ら異なるところはないのである。イス

ラームは偶然に選ばれた或る一人のただの人に下された（下されたことが偶然であるのではなく），全てのただの人に必然的にかかわる教えである。

ただの人でないような，何か特殊な，卓越した神秘的な人間の存在を設定し，そのような存在を通じてのみ神との関係を考えようとするところに，多くの宗教にまつわる全てのまやかしと偽善が生ずるのだと筆者は考えている。

⑫ イスラームの真髄を一言でいえば，この，自分自身の全てをアッラーに委ねることである。委ねるはアラビア語で أسلم といい，その動名詞相当語が إسلام である。إسلام は（自分自身の全てをアッラーに）委ねることであり，これが同時にこの宗教の名称であり，またこの宗教を基盤とした諸文化の名称ですらある。

⑬ この議論の展開は面白いのであるが，とうていここで紹介するいとまがない。別の

LIFE C151 20×20

機会をみつけたい。

⑭ 自由に意志することの出来る人としてアッラーに創造されたのだとも言えるけれど、このような表現は自由意志という言葉に主導権を与えた結果なされるのであって望ましい表現ではない。

表現はともかくとして、アッラーは人間を何か生々とした、独自の思考をなし、喜び悲しむもの、その意味で真に個性的なもの、つまり真の個物として創造されたのである。思ってもみよ、そうでないようなもの、個物とはいえないようなものを造り出されているアッラー、それらにとりかこまれているアッラー、それらのものとアッラーとの関係等々、これをどのようにイメージするというのか。逆説的に言えば、真に個性的なるものがあるからこそ、真の普遍者としてアッラーは生々としてくるのである。生々とした、独自の思考をなす人間があるからこそアッラーがあるのである。

⑮ 契約（アフド）という言葉がクルアーンに散見されるのは事実である。しかしユダヤ教やキリスト教，旧・新約聖書に於いて神と人間とが互いに「我が民」・「我等の神」たるべく結んだ契約という概念に於いては，イスラームの契約とそれらの契約とは意味が全く異なる。そのような契約概念はクルアーンには存在しないと言われる。ムハンマドはユダヤ教とキリスト教という先輩二大宗教に敬意をはらっていた。それらの諸教義をクルアーンの中で紹介するに際して，契約という言葉をそのまま用いたのであろうし，またムハンマド自身商人であり，当時のメッカも国際的大商業都市であって，契約という言葉は彼自身にとっても非常に身近なもので，いわばあやつり易い言葉，口をついて出やすい言葉であったろう。ともかく契約という言葉で大切なことは，神と人間との間の相互的な関係に於いてはイスラームとユダヤ教・キリスト教との間に上述したような大きな相違があるという